

## 歴史

### ～廻船から大商工業都市に～

御坊寺内町は佐竹伊賀守の尽力で、文禄4年（1595）蘭浦の荒地四町四方を得、日高別院を建立したのがはじまりで、この前身となったのが古寺内にあったとされる蘭坊舎である。

江戸時代に入り、別院は西に向かう比井街道の起点となり、東に熊野三山参詣道の紀州街道が通る要地として、日高川河口を利用して廻船業がおおいに栄えた。坊舎周辺には蠟燭・酒・木材問屋や総屋・油屋・旅籠が軒を並ぶ。

明治・大正以降は白浜温泉を開発した小竹岩楠、御坊に戸田銀行・日高紡績を起こした戸田実が出て、日高川の水流を生かした水力発電や紡績・製材業が盛んとなり、和歌山市につぐ商・工業都市として発展、町並みも現在に見るような近代風の町に変わってきた。この地方一帯は、醤油・味噌の発祥地のひとつと言われる。伝統を生かした金（徑）山寺味噌・醤油やなれ寿司がつくられている。

## 町家の個性

### 溶け合う和の中の洋の意匠

御坊の町家は大正から昭和30年にかけての建築が多いといわれる。それらの建物の中には、江戸時代からの和の伝統の上に巧みにとり込まれた洋風の意匠や洋風建築を見ることができる。

#### 洋の意匠



伝統的な建造物に似あうレトロなショーウィンドー  
(中松金物店)

**オダレ**  
垂木の華隠し、もしくは日射しよけや雨よけとして用いられた。軒先空間を創り出している和の意匠である。



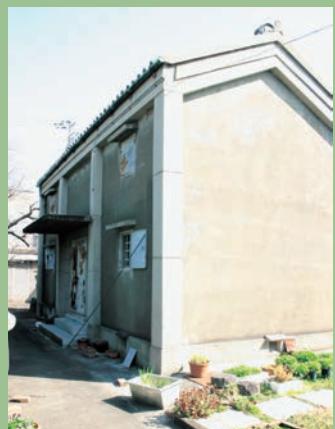
**千木板**  
妻側に2つの板材を交差したもので、御坊以南の多雨地域では風雨で瓦が損傷するのを防ぐために考えられた意匠である。

柱を飾るハイカラな漆喰の文様  
(正宗屋酒店)



古川サイクルの内部  
応接室

昭和11年に建築された木造建物の2階に応接室を設けている。天井は一部カシュー仕上げ、天井板はコルク仕上げで、家具については、すべて造り付けとしている。



洋風蔵

旧中川家の敷地に建てられた木造2階外壁モルタル塗りの蔵。

昭和初期の建築によく見られる漆喰塗りの蔵ではなく、洋風に見せた蔵は少なく貴重である。

#### 和の意匠



## 紀州鉄道物語

### 御坊寺内町の町並み探検は紀州鉄道から

御坊町民の足として、また貨物の搬送のため、JR御坊駅と市街地を結ぶ紀州鉄道（旧名：御坊臨港鉄道）が開業したのは、昭和6年（1931）のことである。今はキテツ1型レールバスが総区間2.7kmを走り続けている。一時、日本一短い鉄道として有名となった。

この鉄道の設立の中心人物は、伊勢屋の当主田淵榮次郎である。彼は、さらに煙樹ヶ浜まで延長し、観光地として開発する構想を立てていたが、これは幻に終わった。



昭和46年頃の西御坊駅